

本作品において、ワイルドの芸術論を形成する根幹的要因の一つとも言えるのである。

1894年2月12日付、ラルフ・ペイン宛の書簡の中で、ワイルドは『ドリアン・グレイの肖像』について次のように述べている。「バジル・ホールウォードは、私自身が自分はこうだと考えている自分であり、ヘンリー卿は、世の中の人々が考えている私であり、ドリアンは、おそらくいつか新しい時代にはあろうが、私がかくありたいと願う自分である」(*The Letters of Oscar Wilde*, ed. Rupert Hart-Davis (London: Rupert Hart-Davis Ltd., 1962), p. 352.)—ここで、画家のバジル、ヘンリー卿、さらにはドリアンまでもが「自分」を映し出す「鏡」である、とワイルドは言っている。否、ワイルドに忠実に従うならば、「ワイルド自身」が彼等を映す「鏡」であると言ったほうが正しいのかもしれない。同様に、「この小説の主要な登場人物たちは、ヴィクトリア時代の人間類型と代表的な芸術運動を体現している」(Christopher S. Nasaal, *Into the Demon Universe* (New Haven: Yale University Press, 1974), pp. 37-72.)とするナサールもまた『ドリアン・グレイの肖像』に内在するある種の〈鏡面的特性〉を見事に言い当てている。

発題要旨 ドリアン・グレイとパラドックス

貝 嶋 崇

(尚絅大学助教授)

『ドリアン・グレイの肖像画』の新しい読み方をパラドックスを中心に考えてみた。パラドックスは、G. Woodcock も指摘するように、ワイルドの人生と密接に結びついているし、彼が愛したものである。それは、彼の人生の中で表裏となった二重の生活の危うい両立から来るものである。この小説の主人公ドリアンも二重生活を送るようになるが、パラドックスの面からみるとそれが一層明瞭になる。

ドリアンは、バジルの家で初めて、ヘンリー卿に会う。ヘンリー卿に会う前は、ドリアンはパラドックスめいたことは何もしゃべらない。ドリアンはヘンリー卿と庭を散策する。その後、彼が自分の肖像画と対面したとき始めて彼はパラドックシカルなものと言いつける。美しい画をのぞき込み彼は、「何と悲しいことか」とため息をつくのである。

公爵夫人は、後になってヘンリー卿のことを Prince Paradox と呼ぶが、まさに、ドリアンに対してヘンリーはパラドックスの影響を与えたといえるのである。

その後ドリアンの二重生活の間が次第に距離をもってくるにつれて、ドリアンはまるでヘンリー卿のような口ぶりで、パラドックスを多用しはじめる。とうとう、ヘンリー卿の

妻から、ドリアンはヘンリー卿の様なことを言うと思われてしまう。そして、それに対して、ドリアンは異議を唱えないのである。

しかし、バジルを自らの手で殺した後になってくると、ドリアンは変わってきて、次第にヘンリー卿の考え方や距離をおくようになる。そして、パラドックスとの関係を切ろうとまでする。けれども、その影響から抜けきらずに、最も重要なパラドックスに固執する。

... to cure the soul by means of the senses, and the senses by means of the soul.

ドリアンは自分の生き方をこのパラドックスのなかに凝縮したのである。更に、このパラドックスを実践することで、パラドックスはパラドックスでなくなってしまう。それがこの小説の結末となってしまう。

この結末は、ショッキングでミステリアスな為に、様々な象徴的な解釈がこれまでなされてきた。しかし、考えようによっては、ごく現実的な結末といえないだろうか。パラドックスが解体され、日常の現実があらわれただけなのである。仮面の自分のみを残そうとすることで、彼は本当の自分を露呈してしまったのである。そこには、醜い本人の肉体が横たわっているのみである。

こうして、パラドックスの観点からドリアンのみでくだけで、この小説とパラドックス、更に、ワイルドとパラドックスの関係の深さがどれほど深いものであるかが、十分に認識される。また、パラドックスを中心にみていくことで、これまで矛盾だらけに見えてきたドリアンの言動が実は、パラドックスの観点からみると何等矛盾のないものとして容易に理解できるのである。

さらに、この小説が持っている魅力の一つとして、このパラドックスを捉えることができる。小説中にあるさまざまなパラドックスは、それ自体独立して、事実の重みと機知の軽さを兼ね備えている。小説中の一つのパラドックスが、小説とは独立して、パラドックスのみで十分に心の琴線にふれ味わいのある音色をだすのである。

発表では、他にも、ヘンリー卿のパラドックス、バジルのパラドックス、構成の上からみたパラドックス等を、解説して、更に、このパラドックスの磁場を解説した。

この小説の序言のなかにてでてくる、言葉 To reveal art and conceal the artist is art's aim. を味わいながら、小説中の様々な場面でいかに作者ワイルドが顔をだすかを考え合わせると、この言葉が作品全体に対してパラドックスになっていることが理解できる。それゆえに、味わい深い魅力がこの言葉がもっているといえるのである。

ワイルド自身がその二重生活の中で、身につけた様々のパラドックスは、その作品中においてもワイルド自身の魅力同様に、決して飽くことのない真実の魅力として、国籍、時代を問わず、直接読者に語りかけてきている。